

近世期精進魚類物の一展開

——『献立合戦笑草』とその周辺

伊藤慎吾

(本学准教授)

はじめに

一五世紀に成立したお伽草子異類合戦物の代表的な作品『精進魚類物語』は、近世後期に至るまで写本として書き継がれ、また近世初期、寛永正保頃に刊行、後に覆刻版も出て、版本としても流布した。¹⁾

近世前期には、この物語の改作が行われるようになった。さらには、『精進魚類物語』の直接影響を受けずに精進物と魚介類との合戦物語、すなわち精進魚類物が創作されるようになった。

本稿で主に取り上げるのは『献立合戦笑草』という写本である。

これは『精進魚類物語』の改作物語の系統に位置付けられるものである。さらに、信州在住の人物による書写に成るもので、その地域性が見出される。物語写本が書写される中で、単に副本を作るといふ営為を越え、創作性が認められるところに、近世後期における物

語受谷と異本生成の問題を考える意義があるように思われる。

そこで本稿では、『魚類扣』の異本として位置付けられる上田図書館花月文庫所蔵『献立合戦笑草』を手掛かりとして、近世期の精進魚類物の地方における展開の一端について考察していきたい。

1 近世期精進魚類物各種

・概要

まず、近世期にはどのような精進魚類物が生まれたのか、見ておきたい。

異類合戦物は室町期のお伽草子やその周辺で生まれてきたものであるが、中でも精進魚類物は精進料理対魚料理という日本の主流をなす食文化を対立軸として成り立っている。そのため時代や地域の違いによって改作しやすい性質をもつ。精進魚類に関連する対立

軸の設定としては、他に魚対鳥の物語も作られた(赤本『魚鳥合戦』、青本『魚鳥あんばいよし』、歌浄瑠璃『さかな浄瑠璃』²⁾等)。さらに近世も後期に下ると、魚と獣の対立軸が現れた。魚貝英記物(『魚貝英記』及びその派生作品)がそれで本文中の表現を借りれば山海の珍珠がテーマと思われる。食文化を背景として作られた異類合戦物は他にも多く、餅及び菓子と酒が対立する餅酒合戦物も都鄙を問わず、また、文学形式に限らず、様々な文芸・芸能のかたちで創作されていた。三枚続きの錦絵「青物魚軍勢大合戦之図」は特によく知られたものだろう。

A 『魚類扣』系

『精進魚類物語』の改作物語が近世前期に作られ、一つの系統を成している。内容はおよそ次の通りである。

魚類元年八月十五夜、魚類方の大将、鯛の將軍かね高が精進方を邪魔に思い、天下を取ろうと企て、戸棚ヶ城に諸国の魚類を招集し、さらに貝類も味方に加わる。これを聞いた精進方の大将浜名の將軍納豆は家来を味噌桶ヶ城に招集し、戸棚ヶ城に押し寄せ、合戦が始まる。この事態に御膳廻りの塩焼の太郎、朝倉の山椒、奈良の諸白が仲裁者となり、和談に及ぶというもの。

管見に入ったところでは、最も古いものは寛文八年(一六六八)に京都の書肆山本九兵衛によって刊行された『軍舞』四種のうち、「う

おがせん³⁾しやうじんもの」である。書写時期は下るが、寛政七年(二七九五)書写の『魚類精進合戦』(塩川和広氏蔵、写一冊)及び『魚類扣』(筆者蔵、江戸後期写一冊)も同じ作品として一括することができ。筆者はこれら三種伝本の関係について、旧稿で三本の共通祖本を想定し、その上で「うおがせん³⁾しやうじんもの」『魚類合戦』『魚類扣』が生まれただろうことを推測した¹⁾。他の系統との識別のしやすさを考え、便宜上、『魚類扣』系とする。本稿で取り上げる『献立合戦笑草』はここから更に改作が行われたものと思われる。これについては本稿第三章以降で述べる。

B 『魚類青物合戦状』系

『魚類扣』系の物語群よりも時代が下ってから成立したと思われるものに『魚類青物合戦状』がある。天明八年(一七八八)書写の『魚類青物合戦状』(静嘉堂文庫蔵、写一冊)と『青物魚類合戦』(筆者蔵、幕末頃写一冊)が確認される。

精進方將軍の白壁豆腐守は家老の黒膚菟藟兵衛・丸麩輕石次郎の意見を受け入れ、魚類方將軍桜鯛赤助の不在をついて城を攻める。しかし、最後には蛤入道ら四天王の働きにより、精進方の城が攻め取られ、捕えられた豆腐守は油揚げにされるといふ内容である。

この物語が『精進魚類物語』の影響下に成ったものであることは、つとに沢井耐三氏によって指摘されている⁵⁾。

C 『五穀繁昌記』系

この系統は、およそ次のような内容である。

魚類方が戦の準備をしていることを、荒布の前が精進方大将豆腐判官六条へ密告する。精進物に対する魚類方の討入計画が露見したことで、八木大王は魚類方大将鯛金高と豆腐判官とを召し寄せ、両者を問答させ、ついに和睦に至る。これが本編で、後半に唐土から渡来した唐芋の物語を付ける。同じく八木大王の治世、すでに帰化した南京芋が唐芋の趨勢に押され、義兄瓢箪兵衛のたくらみに加担して讒奏するも、悪事が露見して処刑されてしまう。これに対して、唐芋はますます繁昌するというものである。

この系統には二種の伝本が確認される。一つは『五穀繁昌記 附荒布の前の事』（徳田和夫氏蔵、写一冊）、もう一つは『精進魚類問答 附唐芋繁昌之卷』（筆者蔵、写一冊）である。前者は文化一三年（一八一六）の書写、後者は翌一四年の書写という、極めて近い時期のものである。浄瑠璃正本の構成を模し、文章も浄瑠璃調であることに特色がある。書名からすると、別作品のような印象を受けると、異本というほどの差異はない。書名が異なること、構成が「巻」と「段」で異なることが大きな違いである。詳細に検討すると、『五穀繁昌記』から『精進魚類問答』へ変わったと、簡単に判断しかねる部分⁽⁶⁾が若干ある。

D 『さかなあを物大合戦』

これは女流作家森田軍光の作になる戯作である。大寄噺尻馬シリーズの一冊として出た。⁽⁷⁾

肴上大食公の治世、椎茸味の守だし有を大将とする精進物が魚類方の城に攻め寄せることを伝え聞いた大将真鯛鳴戸守味能は、諸国の兵を城に集める。合戦に及ぶも、熊野の住人鯨之介の仲裁によって和睦に至るといふもの。

仲裁者を米とせず、鯨の役割とし、また鱸を随行者とするところに新味がある。しかし、鯨にしる鱸にしる、魚扁の漢字であり、ともに『精進魚類物語』の時代から魚類方の主要キャラクターとして登場してきた。これを精進／魚類の仲立ちにするのは設定上、無理があろう。⁽⁸⁾

以上のなかで、新出資料と直接関係する『魚類扣』系統について、以下では掘り下げて行く。

2 『魚類扣』系統

・諸本概要

『魚類扣』系統の精進魚類物は、これまで三種が確認されている。

1 「うおがせん^井しやうじんもの」寛文八年刊『軍舞』（山本九兵

衛版) 所収 射和文庫⁹⁾

2 『魚類扣』 江戸後期写本一冊 伊藤慎吾藏¹⁰⁾

3 『魚類精進合戦』 天明七年写本一冊 塩川和宏氏藏¹¹⁾

まず「うおがせん^并しやうじんもの」は先述した通り、初期赤本『軍舞』に収められている。他に「とりけだ物まひ」「むしまひ」がある。中でも「とりけだ物まひ」と並んで本文に謡曲の符号ある点に特徴がある。ただ「フシ」や「クセ」といった音楽的なそれではなく、「シテ」「ワキ」「ツレ」といった詞章の分担を示すものである。異類合戦物が歌浄瑠璃としても受容されていたところからすると、舞の台本として作られたものとも考えられるが、判然としない。

本文に謡曲の符号があるという稀有な特徴は『魚類扣』にも認められる。しかし、符号の位置が「うおがせん^并しやうじんもの」と異なっており、その意味が分からない。後考を俟つ。

『魚類扣』には巻末に「小鳥揃」「祝井揃」という物尽しの歌謡二曲が収録されている。すべて同筆である。『魚類扣』は異類合戦物の一般的な表現からすれば、「魚類扣」ではなく、「魚類揃」とありたいところである。「扣」が「揃」の誤写の可能性も否定できないだろう。いづれにしろ、歌謡の詞章三種を書き留めたうちの一篇という性格をもつ伝本である。

『魚類精進合戦』は天明七年という明確な書写奥書をもつ。純粹

に物語草子として書写し、読まれたものと見られる。本文に謡曲の符号がない分、一般的な異類合戦物の写本の一つという印象を受ける。

・『魚類合戦』の書誌と梗概

安永三年(一七七四)の書写奥書をもつ写本で、上田市立上田図書館花月文庫の所蔵である。内題をもたず、尾題に「魚類合戦終り」とある。料紙が半丁裁断されている箇所がある。裏写りがするので片面書きである。本文にはなんら影響がないので、書写時にすでに半葉の状態であったと思われる。

本書を考える際に重要な点は、『献立合戦笑草』と合綴してあることである。その表紙には、

献立合戦笑草

魚類合戦

とあって、『献立合戦笑草』の付録として扱われている。両者の書写者はず曾根長次郎という人物である。花月文庫主人飯島花月は同筆の写本のいくつかを戯文集としてまとめた。この集の表紙には、花月の手で次のように記されている。

戯作浄瑠璃 猪鹿嫉闘諍

同(ひらがな盛衰記) 青物宇治川先陣

献立合戦 魚類合戦

艾せりふ 油せりふ 苺せりふ かるた台詞

鼠申状 猫返状 鼠共願書

豊年四阿山参り

名法念仏六字丸効能

このように、花月は本書を戯文として捉えている。

従来、本書が異類合戦物の一冊として認識されて来なかったのは、花月文庫の目録には「猷立合戦笑草」のみが記載されており、国書データベースなどでも同様に登録されてきたからであり、さらに「猷立合戦笑草」という書名からは精進魚類物であることが連想しづらからであらう。しかし、『猷立合戦笑草』とは書型を異にし、書写時期も異なるので、全く独立した作品として区別すべきである。その本文は別に翻刻した。^(註)

さて、物語の展開を簡条書きで示すと、次のように示される。

- 1 正じん元年八月十五夜、魚類方の大将、^a酒の將軍長びれが精進方を邪魔に思い、天下を取ろうと企て、戸店ヶ城に諸国の魚類を招集し、さらに貝類も味方に加わる。
- 2 これを聞いた精進方の大将はまな將軍納豆は家来を味噌桶ヶ城に招集し、戸店ヶ城に押し寄せ、合戦が始まる。
- 3 精進魚類入り乱れ、^c鍋ヶ城に火の手が上がり、その味を堪能

した。

・『魚類合戦』の位置付け

では『魚類合戦』は諸本の中でどのように位置付けられるだろうか。まずは各伝本のプロットを確認しておこう。

①「うおがせん^井しやうじんもの」

- 1 魚類元年八月十五日、魚類方の大将、^a鮭の將軍ながひれが精進方を邪魔に思い、天下（＝台所）を取ろうと企て、戸棚が城に諸国の魚類を招集し、さらに貝類も味方に加わる。

- 2 これを聞いた精進方の大将浜名の將軍納豆殿は家来を味噌桶が城に招集し、戸棚が城に押し寄せ、合戦が始まる。

- 3 精進魚類入り乱れ、^c鍋の城に火の手が上がり、皆、感じ入った。

②『魚類扣』

- 1 魚類元年八月十五夜、魚類方の大将、^a鯛の將軍かね高が精進方を邪魔に思い、天下（＝境内）を取ろうと企て、戸棚が城に諸国の魚類を招集し、さらに貝類も味方に加わる。

- 2 これを聞いた精進方の大将はまれの將軍納豆は家来を味噌桶が城に招集し、戸棚が城に押し寄せ、合戦が始まる。

- 3 この事態に、^c御膳廻りの塩焼の太郎、朝倉の山椒、奈良の諸白が仲裁者となり、和談に及ぶ。その様に皆感じ入った。

③『魚類精進合戦』

1 a 精進元年八月十五夜稲田の年、魚類方の大将、b 鮭の將軍長鱈が精進方を邪魔に思い、天下（＝台所）を取ろうと企て、戸棚が城に諸国の魚類を招集し、さらに貝類も味方に加わる。

2 これを聞いた精進方の大将酒菜將軍納豆公は家来を味噌桶が城に招集し、戸棚が城に押し寄せ、合戦が始まる。

3 精進魚類入り乱れ、c 鍋の城に火の手が上がる。皆、その味に舌打ちし、酒を飲んだ。

特徴的な点を a・b・c で示したので、次のように整理する。

a 時「正じん元年八月十五夜」

①魚類元年八月十五日

②魚類元年八月十五夜

③精進元年八月十五夜稲田の年

b 魚類方大将の名「酒の將軍長びれ」

①鮭の將軍ながひれ

②鯛の將軍かね高

③鮭の將軍長鱈

c 結末「鍋ヶ城に火の手が上がり、その味を堪能した。」

①鍋の城に火の手が上がり、皆、感じ入った。

②御膳廻りの塩焼の太郎、朝倉の山椒、奈良の諸白が仲裁者となり、和談に及ぶ。その様に皆感じ入った。

③鍋の城に火の手が上がる。皆、その味に舌打ちし、酒を飲んだ。

まず、a の時については、①②が魚類元年であるのに対して、③が『魚類合戦』と同じく精進元年という戯年号を用いている。

ついで b の魚類方の將軍の名は、②が鯛の將軍かね高であるのに対して、①③が『魚類合戦』と同じく、鮭の將軍長鱈とする。

そして結末については、鍋の城で乱戦になるまでは共通するが、②は仲裁が入って和睦に及ぶという他とは違うモチーフをもってゐる。①は乱戦になって、「かのしやうじん物、ぎよるいの取あひ、きせん上下をしなへ、かんぜぬものこそなかりけり」と結ばれる。つまり乱戦の様子に感じ入ったというかたちである。これに対して③は鍋の城に入った精進・魚類の人々の味わいに舌打ちして酒を飲んだというかたちを採る。つまり、青物・魚を鍋で茹でて堪能したということである。『魚類合戦』は③と同じかたちをとっている。

以上、a・b・c のことから、『魚類合戦』と最も近似する本文をもつ伝本は、③『魚類精進合戦』であることが分かる。ついで前後関係を検討する必要があるが、詳細は後日に期したい。

筆者は旧稿で、『魚類扣』系統の物語は『精進魚類物語』の影響を受けながら、「うおがせん^井しやうじんもの」『魚類扣』『魚類精進合戦』の共通祖本が作られた。そこから謡曲の符号を付けた上二種と、散文の物語草子として展開した『魚類精進合戦』に展開していったということを推測した¹³。上田図書館花月文庫所蔵『魚類合戦』は、『魚類精進合戦』と同様に読み物として流布したうちの一本として捉えることができるだろう。

3 『献立合戦笑草』の位置付け

・『献立合戦笑草』の書誌と梗概

次に、『魚類合戦』と同じく中曽根長次郎が書写し、合綴にした『献立合戦笑草』についてみていきたい。

本書は上田図書館花月文庫所蔵のもので、『魚類合戦』と合綴されている。中曽根長次郎が天明三年（一七八三）に書写したという奥書をもつもので、『魚類合戦』から九年後の書写ということになる。『魚類合戦』同様に物語の展開は三つにまとめられる。

1 天明元年八月十五夜、魚類方の大将、^a鯉の將軍長尾^{ひれ}が精進方を邪魔に思い、戸棚ヶ城（戸棚の城）に諸国の魚類を招集し、さらに貝類も味方に加わる。

2 これを聞いた精進方の大将畠山の長薯蕷^{ながいも}は家来を招集し、戸棚ヶ城に押し寄せ、合戦が始まる。

3 精進魚類入り乱れ、^c鯛の城に火の手が上がり、煮物となる。精進方は戸棚ヶ城に押しかけ、向付き（向付け）となった。

・『魚類合戦』との関係

このように内容を整理することができるわけだが、aの時は天明元年とする。これは書写の年号が天明であるところからの改変と思われる。bの魚類方の大将も鯉の將軍長尾^{ひれ}で、漢字表記こそ違うが、訓みは①③及び『魚類合戦』と同じである。問題となるのはcの結末部分である。鍋の城に火の手が上がり、ついで精進魚類を味わうというかたちを採るのは③『魚類精進合戦』と『魚類合戦』である。三つの結末を次に掲げてみよう。

『魚類合戦』

思ふかたきとくみ合て鍋が城迄押寄火のお上ヶ戦り^{ついで}彼人々々かふの物うまひ共中く申ばかりわなかりけり

『魚類精進合戦』

時に両陣入乱鍋の城に押被込火の手を上て戦ひ鳧^{ついで}彼人々の其味天晴日本無雙の鏝事と舌打して酒飲さる者社なかりけり

『献立合戦笑草』

「両方互もみ合切合擲あい鍋のちやうまで押寄て火のてを上げて戦ける煮物となりて入にける其時魚類方の大将鮭の將軍長尾は方頭魚兜を着鰐の駒に打乗ッてさもおふように見へにけり精進方の大将畠山の長薯蕷椎茸の兜を着粟毛の駒に乗り出両方たがひになのり合切ッきられつおつつかへしつとたながちやうへ押かけたり上へ下へとにいやぐや野菜と成てむかう付キにとなりにけり

三つに共通するのは、鍋ヶ城（鍋の城）に押し寄せて、入り乱れ、食べ物になったということである。『猷立合戦笑草』では傍線部がそれに対応する。これについて、精進魚類双方の大将同士の一騎打ちとなり、戸棚ヶ城に入り、向付けとなったというモチーフが付け加えられている。このように、『猷立合戦笑草』は非常に独自の本文を持っているので、本文検証から、何を手許に置いて改作したのが判然としない。ただ、『魚類合戦』は中曽根長次郎の手になること、合綴されていること、「両方互もみ合切合擲あい鍋のちやうまで押寄て」という表現は『魚類精進合戦』の「両陣入乱鍋の城に押被込」ではなく『魚類合戦』の「思ふかたきとくみ合て鍋が城迄押寄」を踏まえたものと思われることなどから、『猷立合戦笑草』は『魚類合戦』の改作であろうと考えたい。

いずれにしても、『魚類精進合戦』『魚類合戦』という、読み物と

して展開した系統を受け継ぎ、右の結末部分から窺われるように、大幅に手を加えたものが『猷立合戦笑草』であると言いうことができよう。そして、その改作の手は、モチーフだけでなく、キャラクターについても確認される。

・『猷立合戦笑草』の個体名

魚類や精進（野菜）が擬人化した世界が異類合戦物の基本設定である。その中には鮭の將軍長鱈や浜名將軍納豆のように個体名（擬人名）が付くものも少なくない。表で示したものは、『魚類扣』系統の物語に登場する個体名を有するキャラクターである。他の作品では個体名だが、対象作品では普通名しか出ていない場合、（）で示している。たとえばカレイについてみると、『魚類扣』では「王餘魚の平助」であるが、『魚類精進合戦』では、単に「王餘魚」とのみ記されているから、「（王餘魚）」と記入してある。

まず表を一見して気付くことだが、従来の『魚類扣』系物語に比べ、『猷立合戦笑草』になると、精進／魚類ともに個体名が増加している。『魚類合戦』を例に挙げれば、魚類二〇例、精進七例であるのに対し、『猷立合戦笑草』は魚類が二四例と微増し、精進に至っては一六例と倍増している。これは、改作者が海産物よりも農産物に身近にあるところに起因するのではないか。

そして、これらはどこの住人として描かれているのかというと、

中部地方から関東地方にかけてである。

常陸 水戸の赤る鯛の塩治・さすりの蜂介・鰻のどろぼう・鯀のひ

げ右衛門・きなめのぬる蔵・細魚のいとなが・鱧の左衛門・
鯀の法師ごみの丞・生海鼠のはれ七・鯀のちやうちん毒助

江戸 浅草の廣苔公

上野 渠芋のつるなが・丸芋のずいき

越後 鮭の進・八ツ目のあつそん

尾張・信濃 小角豆長つの・胡蘿蔔の義介

伊豆 鱧井の金海鼠・鱧三郎・鯀目のかたくら・かたくら平目之介・

鯀の浪わり

飛騨 榎の大政・山根の粉柑子くしやみの鼻蔵・清水山葵之介ひや

じる

このように、常陸国をはじめとして、東国から中部地方の住人として登場するキャラクターが多く見受けられる。これが本物語の特徴の一つであることは間違いない。

不思議なことに、他の伝本では他国の住人として登場する魚類までも常陸国の住人と扱われていることである。具体的には近江のカジカ、ナマコ、フグである。特にナマコは『精進魚類物語』に鯉鱒次郎として登場し、『魚類扣』では生海鼠の次郎はり助、『魚類合戦』

ではなまこの次郎はれすけとして登場する。したがって、海鼠の次郎は近江の住人という設定が室町以来の伝統だったといえる。つまり、精進魚類物が展開する中で、カジカやナマコ、フグは近江産という認識が維持されてきたが、『献立合戦笑草』の成立圏・成立時期の段階では、常陸産という認識が優勢になったということであろうか。

右に挙げたように、中部よりも東の産地の精進魚類が登場するわけだが、地域性は他の点からも窺われる。さすりのはち介は常陸の住人として登場するが、サスリはアカザの信州方言である（日本魚類学会編『日本産魚名大辞典』）。またサスリは「蜂ふぐ」とも呼ばれ（『魚鑑』）、そこから、さすりのはち介という名が付けられたものといえる。

同じく『献立合戦笑草』独自のキャラクターにニゴイを擬人化したあらめ鯉太夫が登場する。アラメも信州、特に東北信地方で用いられる。⁽¹⁴⁾

・改名の創作性

これまで見てきたように、本文を改変したり、モチーフを加えたり、独自キャラクターを加えたりすることで、新たな物語へと変貌していった。それともう一つ特徴として挙げておくべきは、個体名の改変である。どの作品にも見られるものだが、『献立合戦笑草』

魚類合戦	献立合戦笑草		備考
		水戸の赤る鰯の塩治	常陸国
		さすりのほち介	常陸国
あらのくわんじや			『精進魚類物語』 鯨冠者
かつら川の左衛門あいの将し あんかふのしやうじばかすけ	山城国 近江国	鯨鱒つるしの馬鹿左衛門	近江国
			『精進魚類物語』 鮎入道(寛永版)
鯛の一分鱒之助 →カジカ	松浦方 近江国	鱒のどろぼう 鱒の進	松浦方 常陸国
鯨の判官長助	近江国	かちかのひげ右衛門	越後国 常陸国
かれいのしやうしやう	伊勢国		伊勢国
		きなめのぬる蔵	常陸国
		鯨井の金海鼠(きんこ)	伊豆国
くじら大すけ	近江国	鯨の大助 源五郎尉家	紀州熊野 近江国
		あらめ鯉(こへ) 大夫	近江国
こちの平助	伊勢国		近江国
			『精進魚類物語』 王余魚中務
酒の將軍長びれ		鯨の將軍長尾(ながびれ) 細魚のいとなが	常陸国
			『精進魚類物語』 鯨大助長[魚文]
すずきの三郎 鯛あかすけ たこの入道だんきほう	紀州熊野	しら鯨(あ)の左衛門/鯨三郎 (鯨の一党)	常陸/伊豆 紀州熊野
			『精進魚類物語』 鯨三郎
			『精進魚類物語』 鯛ノ赤助鯨吉
		鯛の入道鯨(たんぎほう)	
			『精進魚類物語』 鯛入道
土ちやうの法師ごみのすけ なまこの次郎はれすけ	近江国	鯨の法師ごみの丞 生海鼠のはれ七	常陸国 常陸国
			『精進魚類物語』 (土長)
			『精進魚類物語』 鯨次郎
		あらめ鯉(こへ) 大夫	近江国
はららごの太郎つぶさね		鯨子の太郎ざこ丸 鯨目のかたくら/かたくら平目之介	伊豆国
		治郎ひつよし	
次郎ひつよし ふくのちやう判どく助 ぶりの判官	近江国 丹後国	鯨のちやうちん毒助	常陸国 丹後国
			『精進魚類物語』 鯨ノ大隅(守)
		鯨の浪わり	伊豆国
		ハツ目のあつそん	越後国 山城国
よどごい太郎ひれふさ	山城国		
			『精進魚類物語』 青蔓三郎常吉
香豆の三郎四郎		無官の大夫乾苔(アオノリ)	
		砂糖庄司甘苔	
		渠(カシヤウ)芋のつるなが	上野国
			芋渠(イモガシラ) のことか
		角てんの赤蔵	
西山の燕		籠芋のくねとち/同	
畑山しやうじくろ豆		種の大政	飛騨国
			『精進魚類物語』 に島山鞘豆
		くわひの丸ぼう	
		山根の粉柑子くしやみの島蔵	飛騨国
真山のこくうど こんにやくふるへ右衛門 ささきの判官		蒟蒻のくにやらくにやら 小角豆(ささげ) 長つ	尾張・信濃
		薩摩薩(いも)の庄司政房	
		山椒のひりりん山野の鹿蔵	
		丸芋のすいき	上野国
		首藤(つくねいも)の庄司政房	
とうふ冠者源内		豆腐のくわんじや	
		島山の薯蕷(ながいも)	
			『精進魚類物語』 こたうふの権介
はまな將軍なつとう			「れ」は「な(那)」の誤力
はちかみ太郎	山城国	胡蘿蔔(にんじん)の義介 はしかみ太郎から介	尾張・信濃 山城国
		浅草の廣苔公	江戸
→とうふ冠者源内		麩の源内 はず本蓮根	
		清水山葵之介ひやじる	飛騨国
		蕨のしほじ	

うおがせん并しやうじんもの		魚類口		魚類精進合観		
魚 類						
アカイワシ						
アカサ						
アカラ	あからのくわんじや			鯨冠者		
アジ		鯨の冠者				
アユ	あいの四郎	近江国	桂川の左衛門貼之丞	山城国	桂川左衛門貼之助	山城国
アンコウ	あんがうの太郎はかすけ	近江国			鯨ノ庄司馬鹿助	山城国
イシモチ	いしもちの二郎	近江国				
イワシ	いわじの一とうこまのすけ	松浦方	鯨の一党ごまめ之助	松浦方	鯨ノ一黨鯨(ゴミ)之助	松浦方
ウナギ	うなぎの左衛門長介	近江国	鯨の判官ながすけ		鯨(ウナギ)ノ判官長祐	山城国
ウルメイワシ						
カジカ					鯨之助	信濃国
カツオ	かつうきの左衛門	山城国				
カレイ	かれいのちやう	伊勢国	王鯨魚の平助	伊勢国	(王鯨魚)	伊勢国
キナメ						
キンコ						
クジラ	くぢらの大すけ				鯨ノ大助	
ゲンゴロウブナ	源五郎ふないゑ	近江国	源五郎鮒いへ	近江国	源五郎鮒家骨高	近江国
コイ	こいのせう	山城国				
コチ	こちの平助	伊勢国	鯨之丞	伊勢国	鯨之助	伊勢国
コロダイ			ころ鯛の三郎やすとき			
サケ	さけのしやうぐんながひれ				鯨ノ將軍長緒	
サヨリ						
サワラ	さわらの十郎ほそつら	近江国				
シイラ						
スズキ	すずきの三郎	紀州熊野	鯨の三郎	紀州熊野	鯨三郎重家	紀州熊野
タイ	たいのあかすけ		鯨の將軍かね高		鯨ノ赤助	
タコ	たこの入道だんぎぼう	法師武者	鯨の入道だんぎ坊	法師武者	鯨ノ入道短気坊	
チヌダイ			ちぬ鯛の次郎やすかね			
ドジョウ	どじやうのほつしみちのすけ	法師武者	鯨のほうしこみ之助	法師武者	鯨ノ法師鯨之助	信濃国
ナマコ			生海鼠の次郎はり助	近江国	生海鼠ノ庄司彼而令(カレン)助	山城国
ナマズ			鯨の庄司髪なが	近江国		
ニゴイ						
ハモ			鯨のたけ長			
ハララゴ	ははらごの太郎つぶざね				鯨ノ太郎粒実	
ヒラメ						
ヒズ	二郎ひつよし				次男鬚義	
フグ	ふくのちやうはんどくすけ	近江国			鯨ノ相伴毒助	山城国
ブリ	ぶりのはんぐわん	丹後国	鯨の判官	丹後国	鯨判官	丹後国
ボラ						
ヤツメウナギ						
ヨドコイ	よどごいの太郎ひれふさ	山城国	流鯨の太郎ひれふさ	山城国	流鯨太郎鯨房	山城国
精 進						
アオナ	(あきなの一そく)	近江国	青菜の三郎	近江国	青菜ノ三郎	近江国
アオノリ						
アオマメ	あをまめの三郎四郎		青豆の三郎四郎		青豆三郎四郎	
アマノリ						
イモガシラ						
ウド			濁活の大木			
カクテン						
カゴイモ						
カブラ					西山ノ蕪	
カヤ						
クロマメ	きたけ山しやうしくろまめ		晶山の九郎豆		晶山庄司黑豆	
クワイ						
コウジ						
ココロブト	(こゝろぶと)				東山ノ心太	
コンニャク	こんにやくふるひゑもん		蒟(蒟)のふるひ左衛門		蒟蒻の震ひ物(助ノ誤力)	山城国
ササゲ	(さゝげ)		大角豆の三郎		大角豆四郎	
サツマイモ						
サンショウ						
ズイキ						
ツクネイモ						
トウフ			豆腐の冠者		豆腐ノ冠者豆口	
ナガイモ						
ナットウ	はまなのしやうぐんなつとうどの		はまれの將軍納豆		酒菜將軍納豆公	
ニク					持之助	山城国
ニンジン					人參の奇異之助	山城国
ハジカミ	はちかみ太郎	山城国	はちかみの太郎	山城国	糞ミ太郎	山城国
ヒロノリ						
フ			麩の源太		麩の源助	山城国
レンコン						
ワサビ						
ワラビ						
御 前 廻						
サンショウ			朝倉の山并			
シオヤキ			塩焼の太郎			
モロハク			奈良の鯖白			

では特に著しく認められる。以下に、『魚類合戦』に代表させ（「魚類」と表示、対照して示す（適宜、原文仮名表記を漢字に改める）。また『魚類合戦』と異なる場合は注記（*）する。

①魚類 鮫鯨のしやうじ馬鹿すけ

献立 鮫鯨つるしの馬鹿左衛門

*うおがせん 鮫鯨の太郎馬鹿すけ

②魚類 鮫の判官長助

献立 鮫のひげ右衛門

*魚類精進合戦 鱸之助

③魚類 土ちやうの法師ごみのすけ

献立 鮫の法師ごみの巫

*うおがせん どりやうのほつしみちのすけ

魚類精進合戦 鮫ノ法師蟬之助

④魚類 なまこの次郎はれすけ

献立 生海鼠のはれ七

*魚類扣 生海鼠の次郎はり助

魚類精進合戦 生海鼠ノ庄司彼而令助

⑤魚類 鯛の太郎つぶざね

献立 鯛子の太郎ざこ丸

⑥魚類 鯉のちやう判毒助

献立 鯉のちやうちん毒助

*魚類精進合戦 鯉ノ相伴毒助

⑦魚類 菟蕪ふるへ右衛門

献立 菟蕪のぐにやらぐにやら

*魚類精進合戦 菟蕪ノ震ひ物（ふるひもん↓ふるひもの↓震ひ物と誤写したか）

⑧魚類 ささぎの判官

献立 小角豆長つ

*魚類扣 大角豆の三郎

魚類精進合戦 大角豆四郎

⑨魚類 はぢかみ太郎

献立 はぢかみ太郎から介

右に示したように、「魚類合戦」をはじめとする「魚類扣」系統諸本の中でも個体名に異同が散見される。表の備考欄に示した『精進魚類物語』を基準に見ると分かるが、程度の差こそあれ、個々の伝本で誤写とは考えがたい突然変異の事例が認められる。

タイは『精進魚類物語』以来、鯛ノ赤助が受け継がれるが、『魚類扣』では鯛の将軍かね高とする。また、ササゲは大角豆三郎系の名前が広まる中で、『魚類合戦』は大角豆ささぎの判官と名付けている。

『精進魚類物語』までは遡り得なくとも、共通祖本の段階で生み

出されたであろう桂川左衛門（アユ）系の中で「うおがせん^井しやうじんもの」では「あい（鮎）の四郎」とする。その他にも、鮎之丞／鮎之助のような微細な異同には、左衛門／右衛門の場合のような誤写とは看做せない、ささやかな改作意識が読み取られる。ゲンゴロウブナは源五郎鮎家で共通するが、『魚類精進合戦』は「骨高」が付け加わる。豆腐冠者（トウフ）には「豆口」（魚類精進合戦）や「源内」（『魚類合戦』）が付く。

このように、テクストを書写する中で、個体名（擬人名）は物語の展開を変えずに書写者自身の創作意欲を満たす改変可能な部分として受け取られていたのではないだろうか。異類合戦物の異本生成には、テクスト自体の権威のなさが主な要因として挙げられるだろう。それゆえに、大幅なプロットの書き換え、部分的なモチーフの改変から、登場キャラクターの増幅（特に勢揃いの場面）、個体名の改名など、書写者はそれぞれの事情や改作意欲の程度で自分なりの物語草子に仕立てかえることができたのだろう。

『猷立合戦笑草』について見ると、従来の『魚類扣』系統の物語とは、その改変の度合いが違う。

まず、改題の発想が戯作の外題を彷彿とさせるものである。本物語と同じ天明三年に刊行された黄表紙に『笑種花濃台』があり、他にも十返舎一九の合巻『敲打先程御笑唄』、咄本『年男笑草』などが現れた。

大幅なプロットの書き換えは見られないものの、序文を加え、先述のように、結末に大将同士の一騎打ちが加えられている。

また、部分的なモチーフの改変が随所に見受けられる。特に「例の鱈^{いわし}は方頭魚^{かながしら}金魚^{かんとんぼ}銀魚のおんしやういづくかまほこ立ッて御じんだち」（二ウ）のような物尽しの戯文を加筆する。

登場キャラクターは個体名を持たないものを含め、「蛸^{たこ}や海月の骨^{ほね}なしもそゝるに進^{すす}鮓^す鮓^すこちへござれと鮓^{めまる}目に^{あふな}鯨^{じやう}魚^{いしやう}鯉^り蝦夷^{えい}松前の^{まつの}鰓^{うしほ}臍^せ青前^{あおまへ}魚^{いしやう}細^こ魚^{いしやう}も」（二ウ）のように大幅に増えた。

個体名では表中の網掛けをした二八例が、管見に入った諸本中で本物語のみに見られるものである。

個体名の改名ということでは、先に示した諸例がある。「鮫^{さま}鯨^{じやう}のしやうじ馬鹿^{ばか}すけ」を「鮫^{さま}鯨^{じやう}つるしの馬鹿^{ばか}左衛門」にする類である。

以上見てきたように、既成の『魚類扣』系統の物語（おそらく『魚類合戦』）を改作することで、『猷立合戦笑草』は生み出された。その際に、キャラクターの増補と既存キャラクターの改名が顕著に見られたが、それはおそらく異類合戦物における異本の生成に特徴的に指摘できることのように思われる。

・異類合戦物における地域性

異類合戦物は類型的である。二つの対立勢力が合戦するというコンセプトで、多くの場合、仲裁者が入って和睦に及ぶ、またはどち

らかが負けるというかたちを探る。そうした不文律のフレームの中で趣向を凝らすとなれば、レトリック、とりわけ戯文作りに向かうか、キャラクターを工夫するかに改作者の創作意欲は注がれる。

キャラクターを工夫すること、すなわち増補と改名についていえば、『猷立合戦笑草』はその典型例といえることができる。

改作者は自分の知る範囲の情報から相応しい素材を選び出し、物語中へ配置する。「自分の知る範囲」とは何かといえ、辞書や百科全書を駆使するという方法もあっただろうが、もはや、精進魚類物の嚆矢たる『精進魚類物語』のように、幼学の書として堪えられる質を求められることはなくなっていたようである。

とはいえ、辞書や類書、百科全書といった文字で得られるものではない知識がこれらの物語には取り込まれていったようである。『名物名代』餅酒騒動はなし』（江戸後期写一冊）は江戸で作られた餅酒合戦物であるが、これには江戸の各町の名物・名菓、江戸で流通する下り酒が登場する。同様に、『酒煙草合戦』では、越後は下越地方の酒造地が一覧できるような酒の勢揃えの場面がある¹⁵⁾。これらは言うなれば、文献に依拠しない、生活の中で得られた知識である。したがって、異類合戦物の成立は、その作り手（＝改作者）の生活圏に依存しているということができないのではないかと思われる。

おわりに―成立圏としての生活圏

本稿では、『魚類扣』の異本として位置付けられる上田図書館花月文庫所蔵『猷立合戦笑草』を手掛かりとして、近世期の精進魚類物の地方における展開の一端について考察してきた。

『猷立合戦笑草』は精進魚類物のうち、室町時代のお伽草子『精進魚類物語』の流れを直接に汲む『魚類扣』系統の物語（恐らく安永三年書写の『魚類合戦』）に基づく改作物語として位置付けられる。プロットの書き換え、部分的なモチーフの改変、登場キャラクターの増幅、個体名の改名、そして改題によって別作品として認識される程度の派生作品として成立した。

特に注目すべき点はキャラクターの増補・改名であり、ここに地域性が表れている。地方名の使用や中部から関東を中心とした産地、そして、精進方の大幅な増補は、海産物よりも農産物を物産とする生活圏で生まれたことを示すであろう。具体的には淡水魚や農産物に信州方言が用いられているところから、ほぼ成立圏は絞られてくると思われる。おそらく書写者の中曽根長次郎が同時に改作者でもあったということではあるまいか。この点はまだ確証を得られないが、幸いにして同筆の写本が複数花月文庫に収蔵されている。今後、これらを検討材料として、理解を深めていきたい。この問題は、おそらく、近世期に地方で書き継がれてきた中世物語の展開を明らかに

にする一助にもなるだろう。

【注】

- (1) 水野鉄平「古本系の系統について」及び近藤健次「流布本系の系統について」(高橋忠彦・高橋久子・古辞書研究会共編『御伽草子 精進魚類物語 研究・索引篇』汲古書院、二〇〇四年、所収)。
- (2) 西沢一鳳『音曲色菓籠』(一八世紀前半)に『さかな浄瑠璃』「魚の神おろし」及び『肴浄瑠璃』「鳥の勢ぞろへ」が並んで収録されている。『さかな浄瑠璃』は、構成上、この二編を合わせて完結しているものと思われる。なお、〈さかな浄瑠璃〉は酒宴の場で歌われる歌浄瑠璃の異名として用いられることがあるが、ここでは、それに加え、実際に魚類の合戦物を歌った浄瑠璃という意味も掛けられているものと思われる。
- (3) 岡本勝『初期上方子供絵本集』(角川書店、一九八二年)に影印・翻刻を収録する。
- (4) 伊藤慎吾『「魚類扣」考―精進魚類物における位置付けを中心に―』『日本文化研究(國學院大學栃木短期大学)』第五号、二〇二二年三月。 https://www.kokugakuintochigi.ac.jp/tandai/etc/nihonbunka/pdf/05_03.pdf (國學院大學栃木短期大学ホームページ)。
- (5) 沢井耐三「翻刻と解題『魚類青物合戦状』・『さかなあを物大合戦』森川昭編『近世文学論輯』和泉書院、一九九三年。
- (6) 伊藤慎吾『「精進魚類問答」―浄瑠璃風の精進魚類物―』『擬人化と異類合戦の文芸史』(三弥井書店、二〇一八年)に釈文と解説を載せる。
- (7) 岡雅彦編『近世咄本集』(三弥井書店、一九八八年)及び前掲(5) 沢井論文に翻刻掲載されている。

(8) なお、本作中に「蓮根と云種が嶋に、金柑の玉を仕込」という一節がある。蓮根の穴を複数の銃口に見立てているのだとすれば、ガトリング砲から着想を得たものではないだろうかとも思われる。しかし森田軍光は大坂の寄席に関係する女流作家であった可能性が高く、そのよな身で西洋の最新の銃器を知っていたかどうか検討を要する。

- (9) 前掲(3) 岡本著書。
- (10) 前掲(4) 伊藤論文。
- (11) 塩川和宏「資料紹介・架蔵『魚類精進合戦』」(ワークシヨップ『精進魚類物語』を読む)(二〇一七年七月二日・於名古屋大学、伊藤信博主宰)における口頭発表及び配布資料。
- (12) 伊藤慎吾「上田図書館花月文庫所蔵『献立合戦笑草』『魚類合戦』―解題と翻刻―」『学習院女子大学紀要』五八、二〇二四年三月予定。
- (13) 前掲(4) 伊藤論文。
- (14) 「ニゴイ」長野県水産試験場ホームページ。二〇一四年六月二〇日更新。 <https://www.prelnaganu.lg.jp/suisan/joho/sakanatachi/ngoi.html>
- (15) 伊藤慎吾「近世〱近代前期の異類合戦物における嗜好品の受容」『2022年度 公益財団法人たばこ総合研究センター 助成研究報告』二〇二三年一月。『名物名代』餅酒騒動はなし』は『学習院女子大学紀要』二五(二〇二三年三月)に翻刻されている。 https://glim-repo.niit.ac.jp/record/5576/files/joshidaigaku_25_1_6.pdf (学習院学術成果リポジトリ)。「酒煙草合戦」は『たばこ塩の博物館所蔵資料翻刻集』三(一九九八年)及び『國學院大學栃木短期大学紀要』五七(二〇二三年)に翻刻されている。
- (16) 伊藤慎吾「物語草子の浄瑠璃本化―月日の本地―から『帰命日天之御本地』へ」『中世物語資料と近世社会』三弥井書店、二〇一七年参照。